

女子短大生に対するグループワークプログラム実践の試み(2)

- 高岡しの (関西学院大学)
 森際孝司 (京都光華女子大学短期大学部)
 大対香奈子 (近畿大学)
 三田村 仰# (みどりトータルヘルス研究所)

- 猪澤 歩 (みどりトータルヘルス研究所)
 本岡寛子 (近畿大学)
 藤田昌也# (みどりトータルヘルス研究所)
 林 敬子 (みどりトータルヘルス研究所)

【問題と目的】

近年、短期大学においては、いかに短期間で社会人としての基本的な能力を習得させるかが重要な課題の一つとなっている(森際ら, 2012)。特に若者のコミュニケーション力の育成が様々な方面から期待され、「若年者就職基礎能力」の中には具体的なコミュニケーション力として、意思疎通・協調性・自己表現力があげられている(厚生労働省, 2007)。そこで高岡ら (2013) は、短期大学において自己表現スキル・自己/他者理解スキル・アサーションスキル・会話維持スキル・問題解決スキルを体験的に学ぶグループワークプログラムを作成し、実践した。より具体的なスキルの向上を目指し、本研究では大きな講義テーマの変更はせずに高岡ら (2013) の内容を一部修正し、実施した。本研究では主にいくつかの社会的スキル、問題解決スキルについてどの程度習得されたか、それによる大学生活の変化について検討した。

【方法】

対象者: プログラム受講者 12 名 (1 年生 12 名), 未受講者 113 名対象者はすべて A 短期大学の同学科 1 年生であった。

プログラムの概要: 本プログラムは、各 180 分、全 15 回で構成され、2013 年 4 月～7 月の講義時間内に実施した。第 2 回から第 9 回は社会的スキルを中心に、第 10 回から第 15 回は問題解決スキルを中心に扱った。概要については Table 1 に表わした。

測定尺度: 測定尺度としては、①大学生生活充実度(奥田ら, 2010) ②成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005), ③大学生生活充実感尺度(坂柳, 1997), ④日本語版ユーモアスタイル質問紙(吉田, 2012), ⑤特性的自己効力感尺度(成田ら, 1995), ⑥問題解決力尺度短縮版(松尾・岡田・坂野, 2003)を使用した。4 月 (2 回目の講義時, 以下, time 1), 6 月 (9 回目の講義終了時, 以下, time 2), 7 月 (15 回目の講義時, 以下, time 3) の 3 時点において質問紙調査を実施した。time 1 では社会的スキルに関する尺度を, time 2 では社会的スキル, 問題解決スキル

に関する尺度を, time 3 では問題解決スキルに関する尺度を用いた。また, 大学生活に関する尺度については, time 1, 2, 3 とともに回答を求めた。

Table 1 講義のテーマと内容

講義数	テーマ	内容
1	自己紹介	自身を知り, 他者を知る
2	他者の長所を見つける	クラスメイトとの関係作り
3	「伝える・聞く」スキルの基本 (SSTへ準備)	伝えたいことを上手に伝える, 質問をする
4	自己理解・他者理解	客観的に自分を見つめる
5	話の聴き方	良い話の聴き方を考え, 実践する
6	自己表現	自由な会話で自分を表現する
7	話し合い	みんなの意見をまとめる
8	アサーション	より良い自己主張の仕方
9	敬語の練習	敬語に触れる
10	ブレイン・ストーミングとストロング・ポイント	たくさんの意見を出し, その中からより良い選択をする
11	価値観を見つめ直す	さまざまな価値観に触れる
12	マインド・マップで自己表現	客観的に自分と相手を見つめる
13	問題を解決するには①	問題を解決するための5つのコツ～山登りのワーク～
14	問題を解決するには②	問題を解決するための5つのコツ
15	問題を解決するには③	振り返り, 評価するスキル

【結果と考察】

プログラムの 3 時点での各指標の変化と群間の差を検討するため, 群 (プログラム受講者・未受講者) ×時点の 2 要因分散分析を行った。社会的スキルとユーモアスタイルについては time 1, time 2 の 2 時点について, 問題解決力については time 2, time 3 の 2 時点について, 大学生活については time 1, time 3 の 2 時点についてそれぞれ分析した。その結果, 問題解決力尺度の下位因子である消極的問題解決の交互作用のみ有意傾向であり ($F[1,88] = 3.10, p < .10$), 受講者の方が未受講者よりも time 3 において得点が低くなっていたが, その他はいずれも有意な交互作用は見られなかった。しかし, 社会的スキルについては時点の主効果が有意 ($F[1,97] = 12.40, p < .01$), 群の主効果が有意傾向 ($F[1,97] = 3.00, p < .10$) であった。2013 年度実施の本プログラム受講者は未受講者と比較して time 1 時点ですでに社会的スキルの得点が高かった。また 1 年生を対象としていることから, 大学に慣れていくにつれて社会的スキルも発揮されるようになったと考えられる。